農家民宿群形成と継続の課題に関する研究

―石川県能登町「春蘭の里」を事例として―

Study on Development Process of Organized Farm-inn District and Problems of its Continuation

- Case study of "Shunran-no-Sato" in Noto Town, Ishikawa Prefecture-

河村充起* 星野 敏** 清水夏樹*** 鬼塚健一郎**

Atsuki KAWAMURA*, Satoshi HOSHINO**, Natsuki SHIMIZU*** Kenichiro ONITSUKA**

(*京都大学大学院農学研究科 **京都大学大学院地球環境学堂 ***京都大学学際融合教育研究推進センター)

(*Graduate School of Agriculture, Kyoto University, **Graduate School of Global Environmental Studies, Kyoto University, ***Center for the Promotion of Interdisciplinary Education and Research, Kyoto University)

I はじめに

近年、グリーンツーリズム、都市住民による田園回帰志向の高まり¹⁾や外国人旅行者の増加²⁾を背景として地方への訪問者は増加している。2016年3月に政府により策定された「明日の日本を支える観光ビジョン」においても「滞在型農山漁村の確立・形成」が位置付けられ、滞在を伴うインバウンド需要を農山漁村に呼び込む「農泊」^{注1)}の推進を図る³⁾、としている。これら外部からの訪問者の要望に対する農村側の受け入れの柱となっているのが農家民宿である。農家民宿は、訪問者にとっては、農業体験、宿泊、郷土料理等を通じて、農村の生活を体験することが可能となる。民宿を経営する農村側にとっては、農作業体験などを通して、地域外の人に農業や地域についてよく知ってもらうことができ、地域の魅力のアピールにつながる。また、自宅を利用することで、副業として経営が可能であり、宿泊料や体験料による副収入を期待することができる。このように、農家民宿での農村宿泊体験活動は農村地域の地域活性化に向けた高い効果が期待されており、各地で受け入れの取り組みが進められている。

農林水産省ではこのようなビジネスとして農泊に取り組む体制が存在する地域に対し「農泊地域」という言葉を用いて政策的に振興し、地域内合意形成や組織の法人化等、様々な要件を求めている。しかし、それらの要件を満たさなくとも、「ある組織（任意団体、法人格を問わない）を中心とし、複数の農家民宿を柱として農泊の取り組みをおこなっている地域」がある。本研究では、対象地域をより広義で捉えるため、これらを「農家民宿群」と定義する。

農家民宿に関する既往研究には、地域で単独で開業している農家民宿を対象としたものがある。例えば、都市

住民の農家民宿への期待、不安や農家民宿開業時に障害と感ずることについて調査し、それに基づいて日本への農家民宿の定着可能性と望まれる形態を明らかにした研究⁵⁾、「所得確保のための経営」に固執せず、「交流を通じた生きがい」のバランスをとることが農家民宿の経営において重要である点を指摘した考察⁶⁾、などである。また、本研究で定義する農家民宿群と同様の取り組みを対象とした研究には、行政が主導となり進めてきた岩手県遠野市を事例とした山田⁷⁾の研究や、長野県飯田市と福島県喜多方市での第三セクター形態の公社が中心となった取り組みを事例とした鈴木⁸⁾の研究などがある。前者は、ツーリズムの確立により地域への注目を集めることで定住先として期待されること等のメリットをあげ、後者は、農家民宿群を形成することで小中学生教育体験旅行を受け入れることが可能となることを明らかにした。

一方で、地域内の住民が主体となり農家民宿群を形成した事例では、全体の農家民宿に対するコーディネート手段や集客方法といった点において住民自らが考えて行う必要があり、農家民宿群を形成し、継続して経営を行う過程において、単独で経営している農家民宿や行政主導により形成された農家民宿群とは異なる課題とその解決策やメリットが存在すると考えられる。また、農家民宿群の継続的な経営には形成する農家民宿の経営が継続されていくことが必要である。

そこで、本研究では、住民が主体となり農家民宿群を形成し、持続的に経営を行っている先行事例として、石川県能登町「春蘭の里」での取り組みを対象に、住民自らが主体となった農家民宿群の形成・継続における過程の実態を明らかにするとともに、その過程において生じた課題やどのように課題解決が図られたのかを明らかにすることを目的とする。

表1 ヒアリング対象者と調査内容

Table 1 A list of interviewees and major subjects of the interview

対象者属性	調査内容
T氏 (リーダー)	<ul style="list-style-type: none"> ・『春蘭の里』の実態把握 ・成立過程 ・地域住民との関わり方
春蘭の里 事務局員	<ul style="list-style-type: none"> ・T氏以外の春蘭の里事務局員の働き ・農家民宿経営者や地域との関わり
農家民宿 経営者	<ul style="list-style-type: none"> ・農家民宿開業のきっかけ ・農家民宿群の役割 ・リーダーとの関わり方

II 研究方法

春蘭の里での農家民宿群形成・継続の実態を明らかにするため、既往研究で取り上げられている春蘭の里の情報から概要を把握し、春蘭の里実行委員会事務局のリーダーであるT氏、事務局員、農家民宿開業者等へのヒアリング調査を実施した。また、調査の一環として、2016年11月に春蘭の里に滞在して実際の事務局作業を体験するとともに、参与観察を行った。

結果を先取りして述べるが、本研究では、収集した情報をもとに春蘭の里における農家民宿群形成・継続過程に関して、1996年における春蘭の里実行委員会の創設以降を「始動期」、団体客の受け入れシステムの形成を始めた2005年以降を「形成期」、そして、世界農業遺産に登録され、訪問者の増加、行政や旅行会社から注目される、といった外的要因による変化に対応した2011年以降を「発展期」と3区分して整理を行う。そして、それぞれの過程での課題と解決策の考察を行う。

III 農家民宿群「春蘭の里」形成・継続の実態

1 対象地の概要

能登半島の大半を占める能登町を含めた4市4町は2011年6月に世界農業遺産に認定され、自然資源や農業・農法、伝統文化的資産が数多く残る地域である。能登町は能登半島北部に位置し、2005年に2町1村が合併してできた町である(図1)。人口は2017年1月1日時点で18,287人であり⁹⁾、年々減少傾向にある。主な産業は農業、水産業などの第一次産業である。25年間で人口が1万人近く減少し、少子高齢化による地域経営の担い手確保が問題となっている。

2 春蘭の里の実態

春蘭の里には2016年現在、47軒の農家民宿が存在する。それぞれの民宿は、地域の中心であり団体客の集合場所となる「こぶし」から車で15分圏内に位置し、年間約1万人の訪問客が存在する地域である。

(1) 始動期 (1996-2005)

当該地区においては、将来の地域社会の存続に危機感を共有していた地域の農家から会社経営者等様々な業種の40歳代、50歳代の7人が、およそ5年間の議論を重ねた末、1996年に春蘭の里実行委員会を設立した。「やりたい人だけでやる。いいものには自然とみんなついてくる」という考えに立ち、形成初期段階においては地域全体で合意形成をとることはなかった。実行委員会では、地域社会として存続していける安定的な収入源を作することを主目的とし、「なにもない良さを生かそう」と考え、実質的リーダーとなっているT氏が翌1997年、春蘭の里で農家民宿第一号となる「春蘭の宿」^{注2)}を開業した。

「お金(収入)があれば若者は定住してくれる」との考えから、地域産業とするため1泊1人およそ1万円というやや高めめの値段設定を行った。この時から、1民宿1グループの受け入れ、輪島塗の器による料理の提供、砂糖や化学調味料の不使用、地域食材を用いた料理13品目の提供など、民宿共通のルールを作り、宿泊客の受け入れを行っている。

2003年には、石川県で最初のグリーンツーリズム促進特区に認定され、民宿開業時の施設、設備の簡易化が行われた。これを契機とし、T氏の親戚および「春蘭の宿」の経営に携わっていた人により4軒の農家民宿が開業し、組織的な受け入れ体制が形成された。同2003年、農林水産加工施設の管理、運営を行う組織である農事組合法人「のと夢づくり工房(以下、夢づくり工房)」が開業した。ここでは地元で採れた野菜やきのこの加工(漬物やみそ)、販売を行っている。また、春蘭の里では農家民宿宿泊客に対して「どの民宿に宿泊しても同じクオリティのサービスを提供すること」を旨としており、宿泊客に提供する料理の味噌や漬物を夢づくり工房が一括して生産している。農家民宿群始動期において、数軒の農家民宿の立ち上げと直売所の整備が見られた。

図1 春蘭の里の位置¹⁰⁾

Fig. 1 The location of Shunran-no-Sato in Ishikawa Prefecture

図2 春蘭の里の形成期以降の訪問者数推移（ヒアリングと浦¹¹⁾を参考に筆者作成）

Fig. 2 The number of visitors in “Shunran-no-Sato” from second period

(2) 形成期（2006-2010）

春蘭の里への訪問者増加の一つの契機として、T氏や事務局を仲介とした団体宿泊客の受け入れがあった。団体客の受け入れを可能にした施設が2006年に宮地小学校跡に開業した体験・宿泊施設である宮地交流宿泊所「こぶし」である。「こぶし」は2階建ての施設で、1階にはロビーと研修室、男女トイレ、食堂、配膳室、厨房、2階には風呂トイレ付きのワンルームの客室が10部屋ある。将来的に交流施設として活用が見込めなくなった場合には高齢者の集合住宅として転用することも想定して、客室やトイレはすべてバリアフリー仕様で作られている。

「こぶし」を管理しているのはNPO法人コブシである。NPO法人コブシは能登町の指定管理者となっているが、町からの指定管理料等の収入はない。そのため、光熱水費や運営費等、安定した維持管理費用を確保できるように全10部屋を部屋単位で利用権を貸し出す「オーナー制度」をとっている。「こぶし」のそれぞれの部屋は月々1万7千円で利用権を購入することができる。オーナーとなると清掃や布団準備といった管理を行い、事務局から斡旋された宿泊客がいてその宿泊料から事務局への手数料8%を差し引いた宿泊料金がオーナーに還元される仕組みとなっている。

「こぶし」は大人数の訪問客（修学旅行者等）を受け入れの際、「入村式」や「離村式」の集合場所や食堂を利用した食事提供の場、地域住民の交流の場、として活用されている。「こぶし」や数軒の農家民宿の存在により訪問客が増加する中、T氏は集落内の住民に対し、農家民宿数確保のために開業の提案を行い、2007年には15軒、2009年には30軒と数を増やした。周りの住民の開業や訪問者の増加を実感し、またT氏の「できるときだけいい」という言葉を信じ、受け入れ可能な時だけ、という条件で開業した民宿も存在する。

一方、修学旅行等の団体客受け入れの必要性に伴い、農家民宿数の確保だけでなく、経営を維持する必要性から、夢づくり工房が漬物やみそだけでなく、料理提供が困難な民宿に対して、宿泊客への料理の代行、配達、といった取り組みも始められた。

このように、「形成期」においては農家民宿群内の事業の連携が確立された。

(3) 発展期（2011-現在）

2011年、春蘭の里が位置する能登町を含む能登半島が世界農業遺産に指定されて以降、訪問者が大きく増加しており、2016年現在、年間約1万人が訪れている。これらの訪問客を一元的に管理し、各民宿への配分を行っているのが春蘭の里事務局である。事務局はT氏を中心として現在計4名で構成されている。農家民宿やこぶしへの宿泊客の受け入れ等を一括で管理し、それぞれの民宿への宿泊客割り当て調整といった仕事のほか、広報としてのホームページの運用を行い、春蘭の里への訪問者に対する一元的な窓口としての対外的な機能を果たしている。さらに、料理メニューの提案、民宿開業者への講習会等といった対内機能も兼ね備えている。また、団体旅行者（主に修学旅行者）に対する農業農村体験においては事務局員が道具や場所の準備、民宿経営者側の急なキャンセルへの対応といった様々な業務を担当している。このような事務局の働きにより、2016年には250人の修学旅行生の一団を受け入れ、翌年は300人規模の一団の受け入れを可能とする整備を進めている。

事務局は農家民宿だけでなく、「こぶし」、「のと夢づくり工房」の収益からも手数料としてそれぞれ8%を受け取り、それを運営費としている（図3）。現在の4名の属性は表2に示すように2名が2016年8月より参加している。基本的にはN氏がそれぞれの民宿への宿泊客の割り振りを行い、O氏とH氏がその他の業務をこなしてい

表2 事務局メンバーの属性

Table 2 Attributes of the members of secretariat	
	属性
T氏	事務局のリーダー
N氏	2016年8月から事務局に入った地元住民
O氏	2016年8月から事務局に入った地域おこし協力隊
H氏	普段は夢づくり工房で作業するUターン者

る。

T氏は自らの農家民宿「春蘭の宿」に加え、空き家を買取り、新たに農家民宿を開業し、地域住民をそこで雇用して経営する方式で、積極的に空き家を活用する取り組みを行っている。そのほか、春蘭の里の活動の一環として里山の保全活動や外部業者と協力しながら耕作放棄地防止に努める活動の中心として働き、地域資源の保全活動、また、外部への講演会に出向くこと、視察への対応等を通じた春蘭の里への新たな集客活動を行っている。

農家民宿群内部において、近年の開業者は、リーダーであるT氏だけでなく、先の開業者から農家民宿経営の情報を収集することで開業に至っていた。また、各戸の農家民宿経営を長年続けることにより、試行錯誤の中で宿泊客との対応を学んでいる、ということであった。特に、外国人旅行者等の対応が難しい、分からないといった際、他の開業者と情報交換を行うことにより対応を考えている事例もあった。

一方で民宿経営者の年齢は70～80歳代が多く、後継者のいない民宿も多い。このような、高齢や病気等で民宿経営が続けるのが困難になった民宿に対して、営業許可を獲得した家屋を他の地域住民が利用し宿泊客を受け入れるという「継業」^{注3)}の取り組みにより民宿の数の維持を図っている。また、2016年12月現在、3つの農家民宿を外部からの移住者が開業し、T氏や事務局、地域住民と協力しながら経営している。

宿泊客の多くは事務局を通して春蘭の里へ訪問する

図3 宿泊者の受け入れの仕組み

Fig.3 System of guest's acceptance

一方で、図3に示すように、それぞれの農家民宿が独自に宣伝を行い、旅行客を受け入れることも可能であり、それぞれの民宿での競争を図りつつ、事務局に頼らずとも、やる気のある民宿は稼ぐことが可能なシステムを構築している。

このように、発展期においては世界農業遺産の指定を契機とした外部からの注目を反映し、増加する訪問者に対する内部経営の維持、効率化が進められた。

IV リーダーと民宿群システムの役割の考察

春蘭の里においては、課題の多くがリーダー、そして民宿群というシステムにより解決が図られていたと考えられる。そこで、それぞれに関して過程の中で担っていた役割の考察を行う。

1 リーダーの役割

春蘭の里の事例において農家民宿群の第一号である民宿を形成し、1民宿1グループの受け入れ、輪島塗の食器の活用、地域食材を用いた料理提供、といった経営方針を示したリーダーの働きは大きいものであったと考えられる。「始動期」においては図4に示すようにT氏の

図4 春蘭の里の組織変遷

Fig. 4 Transition of organization in Shunran-no-Sato

親戚や春蘭の宿に携わっていた人、といった T 氏と関係性の強い人を巻き込んでいくことにより農家民宿群を拡大していた。一方で、このようなリーダーとの関係性に基づき開業したため、他の地域住民へと広がりを見せるまでに時間を要したと考えられる。「形成期」においては、団体客の受け入れを可能とする現在の農家民宿群システムを構築した。T 氏により受け入れ民宿の数の確保、およびコーディネートによる質の確保がなされ、「こぶし」、夢づくり工房といった他の事業により、農家民宿経営の負担と考えられる項目に対し軽減するためのシステムの構築につながった。

「発展期」においては、T 氏の果たす役割には、主に事務局のリーダーとしての対内的機能と対外的機能の役割の 2 つが存在した。対内的機能としては、修学旅行生等の団体客を受け入れるための農家民宿の数の維持に対して果たしている役割である。多くの修学旅行生の受け入れ実績もあり、翌年も同様あるいはそれ以上の需要が見込まれる。一方、高齢化により経営が困難となる民宿が増える中で、T 氏は、T 氏に賛同して積極的に取り組み始めた地域内の他の居住者が、経営許可を得た民宿や空き家を利用して農家民宿を営営することや、移住者が農家民宿を新たに開業することを支援し、大人数の団受ける民宿数の維持に努めている。対外的機能としては、地域外から移住者や訪問客を呼び込むという役割を果たしている。講演会や視察への対応を通して「地域の顔」としての T 氏自身の集客効果もあり、春蘭の里の形成に対し、このリーダーの働きは極めて大きかったと推測される。

2 農家民宿群というシステムの効果

農家民宿群の「形成期」から「発展期」に至る段階においてはリーダーの働きに加え、農家民宿群、というシステムが構築されたことが大きかったと考えられる。

「形成期」においては春蘭の里事務局による料理や経営方針のプロデュース、夢づくり工房からの料理提供の補助といった農家民宿を開業、経営していく際への負担と予想される事柄に対して、助けとなると考えられる項目が多くあった。また、「こぶし」が開業したことにより地域に団体客を受け入れる基盤の整備ができ、地域全体として需要を見込むことが可能となった。

「発展期」では、事務局が、世界農業遺産認定以降増え続ける訪問者や対外交渉、PR 等を一括で対応することで負担を一元化している。また、経営者の病気や体調不良で宿泊客の受け入れが難しい場合にも、予備の民宿を常に確保し、他の住民が手伝いとして協力すること等、農家民宿群として発展していく過程において、事務局の

表 3 春蘭の里の波及効果

Table 3 The effects of Shunran-no-Sato

経済効果	対外	<ul style="list-style-type: none"> ・農家民宿訪問者 5000 人超/年 ・こぶし宿泊者 6000 人超/年 ・直売所での購入
	対内	<ul style="list-style-type: none"> ・こぶしのオーナー料収入 ・のと夢づくり工房での購入 ・事務局 (4 名) 夢づくり工房 (6 名) 等の雇用の創出
非経済効果		<ul style="list-style-type: none"> ・廃校となった学校施設の利用 ・空き家の活用 ・地域の祭りの存続 ・子どもの声が聞こえることによる活気 ・農作業体験の必要性から農業の存続

(ヒアリングをもとに筆者作成)

役割が強化されている。また、この地域において農家民宿を経営する際には、開業時に経営方法、春蘭の里におけるノウハウを地域で既に開業している民宿から学ぶことが可能となり、単独での開業よりも負担が大きく軽減されていると推察される。

そのほか、民宿群というシステムを構築することにより、地域内で波及効果を分散、共有できたことが考えられる。春蘭の里では表 3 に示すような雇用の創出や祭りの復活、訪問者による地域の活気の増大、といった経済効果、非経済効果が生み出されている。これらの効果に関して、集落に訪問者が訪れることにより特定の人物や団体のみが収益を得るのではなく、地域の取り組みに参加する人それぞれにその収益が地域内に分散するシステムが構築されていた。このようなシステムを構築したことにより春蘭の里の取り組みに積極的に参画する住民が広がりを見せ、現在の農家民宿群春蘭の里の発展につながってきていると推察される。

V まとめ

本研究では、住民が主体となった農家民宿群の形成・継続の過程に着目し、その過程を三区区分し、それぞれの過程においてリーダーの果たした役割、農家民宿群の組織の変遷、関連主体の役割を明らかにした。

「始動期」から「形成期」の段階では、親類や経営に携わった人を巻きこんだ農家民宿の数の確保、経営方針といった質の確保に果たしたリーダーの働きが非常に大きいものであった。また、「形成期」から「発展期」に至る過程においてはリーダーの働きに加え、形成された民宿群というシステムにより地域全体で協力し、経営ノウハウや宿泊客との対応といったものを相互に伝え合うことができることにより、安定した経営環境の構築につながったと考えられる。また、宿泊客の受け入れや春蘭の里の宣伝・広報に関して個々の民宿独自で行うのではなく、事務局が一括して行うことによりそれぞれの民宿経営の

負担を減らす結果につながっていたと考えられ、春蘭の里が広がりを見せるにつれ、事務局機能の拡張も行われていった。春蘭の里の事例においては行政に頼らないとしている一方で、地域内のリーダーを担っているT氏が、群内部のコーディネート、外部との対応、といった行政機能のような役割を果たし、農家民宿群経営の維持、涉外対応といった点を担っていたと考えられる。T氏の働きもあり、このような農家民宿群のシステムが構築され、その効果を地域全体が享受できたことにより、行政の支援に頼りきらずとも継続経営ができ、取り組みへの参加者を増やすことができたと考えられる。そのため、今後の農家民宿群の継続性に関していえば、リーダーの果たしてきた多くの役割を事務局が組織的に担うこと、事務局員の世代交代や定着が望まれる。2016年8月に2人の事務局員が新たに加わったが、このことは今後、農家民宿群事務局の世代交代を進めるための対応の一つとなると考えられる。

謝辞

本研究は、石川県穴水町からの受託研究「あなみず農村ビジネス創出事業」の関連調査として実施したものである。調査の過程で、穴水町役場、能登町役場、そして春蘭の里事務局の皆様にご多大なご協力をいただいた。また、上記の研究メンバーとして参画した韓国政府農林畜産部主任研究員金斗煥博士には、全般にわたりアドバイスを頂いた。紙面を借りて御礼申し上げる。

注

注1) 農泊とは、日本ならではの伝統的な生活体験や農山漁村地域の人々との交流を楽しむ滞在とされている⁴⁾。

注2) 春蘭の宿は当時農家民宿等の規制緩和がないので民宿営業の許可を得て開業した。

注3) 継業とは、身内や従業員が事業を引き継ぐのではなく、意欲ある第三者に事業を継いでもらうこと。

引用文献

- 1) 総務省：「田園回帰」に関する調査報告書中間報告，
<http://www.soumu.go.jp/main_content/000474366.pdf>，
更新日時不明，2017年5月18日。
- 2) 観光庁：訪日外国人消費動向調査，
<<https://www.mlit.go.jp/common/001107179.pdf>>，
更新日時不明，2017年5月19日。
- 3) 観光庁：明日の日本を支える観光ビジョン，
<<http://www.mlit.go.jp/common/001126601.pdf>>，
更新日時不明，2017年5月19日。
- 4) 農林水産省：農泊を中心とした都市と農山漁村の共生・対流，
<<http://www.maff.go.jp/j/nousin/kouryu/170203.html>>，
2017年2月3日，2017年5月19日。
- 5) 去石真佐子・藤崎浩幸（2000）：農家民宿に対する意識調査－仙台市民と岩手県浄法寺町・花泉町農家への調査－，農村計画論文集，第2集，283-288。
- 6) 金俊豪・三橋伸夫（2007）：農家民宿の持続的経営に向けた施設・サービス基準に関する考察，農村計画学会誌，26巻，341-346。
- 7) 山田晴義（2011）：農村移住による農村再生のための計画的課題と展望，農村計画学会誌，Vol.29，414-417。
- 8) 鈴村源太郎（2009）：小中学生の体験教育旅行受け入れによる農村地域活性化，農林水産政策研究，第15号，41-59。
- 9) 能登町：能登町ホームページ，
<http://www.town.noto.lg.jp/www/normal_top.jsp>，
更新日時不明，2017年5月19日。
- 10) 山下良平・一ノ瀬友博（2011）：地域発展過程の合意形成の特性に着目した過疎地型地域経営モデルに関する事例的研究－石川県能登町「春蘭の里」の取り組みから－，農村計画学会誌，Vol.30，436-442。
- 11) 浦達雄（2015）：奥能登・春蘭の里における農村の活性化，大阪観光大学紀要，第15号，1-7。

Summary: We investigated the development process of organized farm-inn district, “Shunran-no-Sato” in Noto Town, Ishikawa Prefecture and examined some problems. In order to clarify the roles of the leader and the system of organized farm-inn district, we divided the whole process (from 1996 to 2017) of the organized farm-inn district into three periods: the starting period, the forming period and the developing period. Based on intensive interviews and participant observation, we found that the roles of the leader were quite important in both the starting period and the forming period. On the other hand, establishing the system of organized farm-inn district become important in the forming period and developing period. In the future, the succession of the role of the leader becomes a most serious problem for this district.

キーワード(Keywords)：春蘭の里 (Shunran-no-Sato)，農泊 (Rural Stay)，農家民宿(Farm-inn)，経営 (Management)

(2017年6月10日 原稿受理)

(2017年10月1日 採用決定)